

令和 4 年 6 月 28 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04787

研究課題名（和文）教科の固有性と共通性を視点とする社会系教育の学力形成に関する理論的・実践的研究

研究課題名（英文）A Theoretical and Practical Study on the Fostering of Scholastic Abilities in Social Studies from the Perspective of Subject Specificity and Commonality

研究代表者

山田 秀和（Yamada, Hidekazu）

岡山大学・教育学域・准教授

研究者番号：50400122

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、教科の固有性と共通性を視点にして、社会系教育の学力形成論を理論的・実践的に究明することにある。日本や海外（主にアメリカ）の事例に手がかりを求め、以下の成果を得た。第一は、社会系教科の固有性および他教科との共通性や横断性の観点から、社会系教育のカリキュラムや授業の構成とそれらが育成する学力の特質を検討したことである。第二は、学力形成を促すための教師の姿勢を明確にしたことである。第三は、学力形成を支える教科横断的な取り組みについて明示したことである。第四は、学力形成を促す授業の具体像を構想したことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、教科横断的で汎用的な資質・能力の育成を視野に入れて社会系教育のカリキュラムや授業をデザインするための方法論となりうる。また、学力形成を促すための基本的な条件についても考察を加えている。本研究は、学校現場での実践に資する理論と方法を多様な観点から具体化したところに学術的・社会的意義を有しており、教育の現代的動向に対応した今後の実践的研究の基礎となりうるものである。

研究成果の概要（英文）：This study theoretically and practically investigates the methods of fostering scholastic abilities in social studies from the perspective of subject specificity and commonality. The following research was conducted by considering cases in Japan and overseas (mainly in the U.S.). First, I examined the characteristics of scholastic abilities to be developed in the social studies curricula and classes from the perspective of subject specificity and commonality. Second, I identified how teachers encouraged the development of scholastic abilities. Third, I presented cross-curricular initiatives supporting the aforementioned development. Fourth, based on theoretical considerations, I designed several lessons.

研究分野：社会科教育学

キーワード：教科教育 社会系教育 社会科 教科の固有性と共通性 学力形成

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究は、教科横断的で汎用的な資質・能力への注目が高まり、世界各国で教育改革が進められていたことを背景としている。日本においても、学習指導要領改訂に向けた議論が展開され、教科の性格や枠組みが問い直されていた。しかし、以下のような状況が見られた。

第一に、学習指導要領改訂に関心が集まる一方で、社会系教育の学力形成に関する原理的で体系的な研究が不足していた。日本のみならず世界的な視野のもとで、社会系教育固有の学力と通教料的な学力をどのように育成すればよいのかを究明することが求められていた。

第二に、近年の学力論の動向に対応したカリキュラムや授業の具体的な研究が不足していた。例えば、アメリカの動向に目を向けると、コモン・コア・ステート・スタンダード(2010)の登場以降、社会科と言語教科(リテラシー教育)の統合に注目が集まり、対応する教材や事例集等が数多く出版されていた。それに伴い、社会科の固有性や、言語教科をはじめとする他教科との共通性に関する議論がなされてきた。しかし、開発されたカリキュラムや授業を、学力形成論との関係で体系的に分析し整序するような研究は進んでいなかった。

このような状況に対して、筆者は社会系教育と他教科(特に言語教科)との統合に注目し、教科の固有性と共通性についての考察を行ってきた。しかし、統合のあり方や形態に焦点を当てていたため、どのような資質・能力をどのように育成すればよいのかという学力形成論には踏み込んでいなかった。

2. 研究の目的

本研究は、教科の固有性と共通性を視点にして、社会系教育の学力形成論を理論的・実践的に究明することを目的とする。本研究が当初ねらいとしていたのは、以下の解明にある。

第一は、社会系教育における学力像である。教科の固有性と共通性のどちらを重視するかによって、めざされる学力像は異なる。固有性重視と共通性重視の考え方の間を典型的に整理し、それぞれの学力像をモデル化する。

第二は、社会系教育のカリキュラム・授業の理論的モデルである。類型をもとにして、学力形成を促すための方法論を明確にし、カリキュラムや授業の構成原理を明らかにする。

第三は、社会系教育のカリキュラム・授業の実践的モデルである。類型をもとにして、学力形成を促すカリキュラムや授業の具体像を構想し、開発する。

第四は、実践の省察に基づく各類型の意義と課題である。開発した授業を実践し、それを通して、類型や理論、モデルを省察するとともに、それぞれの意義と課題を明らかにする。

3. 研究の方法

先に示した目的を達成するために、以下の手続きで本研究を進めた。

第一に、本研究は文献に依拠する部分が大いなので、関連する資料を幅広く収集した。特に、海外(特にアメリカ)の理論書や教材等を重点的に集めた。

第二に、教科の固有性と共通性を視点にして、社会系教育のカリキュラムや授業の構成とそれらが育成する学力の特質を分析した。当初は類型化を行う予定であったが、様々な観点から多様なカリキュラムや授業のあり方を考察することを優先し、研究を進めた。また、学力形成を促すための教師の姿勢や、教科をこえた学校全体の取り組みについても考察した。

第三に、教科の固有性と共通性を視点にして、学力形成を促す社会系教育の授業の具体像を構想した。この点に関しては、第二に述べた考察と同時並行で進めた。

なお、本研究は学校現場での実践と検証を目的に入れていたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、実施することはできなかった。

4. 研究成果

本研究の成果を四つの項目で整理したい。

(1) 学力形成を促すカリキュラムや授業に関する考察

本研究では、カリキュラムや授業の構成と学力形成の特質に関する原理的考察を行った。その成果は以下の通りである。

第一に、本研究の一つの前提となるアメリカの教科構造を分析し、二つの方向性を抽出することができた。一つは教科等の固有性を重視する方向性である。具体的には、オハイオ州の教科等のスタンダードの分析を通して、教科・領域個々のねらいを強く意識して学力を育み、人間形成を促そうとする傾向を読み取った。そして、それぞれの教科や領域でしかできない人間形成を最大限に促すことができる点にこの方向性の意義を見出した。もう一つは、教科等の横断性や共通性を重視する方向性である。具体的には、ニューヨーク州の教科等のスタンダードの分析を通して、教科や領域をまたぐ共通のねらいを強く意識して学力を育み、人間形成を促そうとする傾向を読み取った。そして、各教科等が共通の資質・能力を想定しつつ、それぞれの特性に応じた人間形成を促すことができる点にこの方向性の意義を見出した。

第二に、教科の共通性を重視した社会系教育における学力形成についての考察を深めることができた。特に、教科横断的なリテラシー教育と社会科の統合に注目し、前回の科研費研究課題の成果を再検討しつつ、アメリカに見られる市民性育成の二つの型を明らかにした。その一つは、統合的思考者 (integrated thinkers) の育成をめざす社会科とリテラシー教育の統合である。この統合は、様々な学問領域の知識を働かせて思考することができる能力を市民性の中核として重視する。そして、授業は、テキストの読解に基づいて様々な学問領域の知識を活用させ、社会生活を読み解かせていく過程として構成されることになる。もう一つは、批判的思考者 (critical thinkers) の育成をめざす社会科とリテラシー教育の統合である。この統合は、社会の不正について思考し、変革のために行動することができる能力を市民性の中核として重視する。そして、授業は、テキストの読解に基づいて不正の問題を顕在化させ、過去の社会正義問題の考察を通して現在社会の変革に向き合わせていく過程として構成されることになる。これら二つの型は、どちらも民主主義社会の市民を育成するという目的のもとで社会科とリテラシー教育を統合するものである。しかし、ねらいとする学力の重点の置き方が異なることを本研究では明確にした。

第三に、スキルの育成に特化して、教科の固有性と共通性の視点から考察を深めることができた。特に、21世紀型スキルやコモン・コア・ステート・スタンダードに見られる教科・領域横断的なスキルと、NCSSの社会科カリキュラム・スタンダードや歴史ナショナル・スタンダードに見られる教科・領域固有のスキルの性格をそれぞれ整理し、構造的に示した。また、スキルの構造を意識したスキル育成の方略を示すために、アメリカの教材(歴史学習のワークブック)を分析した。この教材は、教科・領域横断的なスキルの育成を意識した教科・領域固有のスキルの学習を想定したものとなっており、日々の社会系教育のカリキュラムや授業をデザインする上で示唆的であることを指摘した。

(2) 学力形成を促す教師の姿勢に関する考察

子どもの学力を育成する上で重要なのは、カリキュラムや授業だけではない。教師がどのように教育のねらいを設定し、内容や方法を選定するのも重要な要素である。本研究では、教科の固有性と共通性に関連する以下の二つの考察を行った。その成果は以下の通りである。

第一に、アメリカの教師がどのようにリテラシー教育に向き合い、カリキュラムや授業を調整しているのか、すなわち、どのように教師がゲートキーピングを行っているのかについて考察を深めることができた(教師のゲートキーピングという概念は、スティーブン・J・ソートンの所論に基づく)。具体的には、社会正義志向の教師に関するアメリカの研究を手がかりにして、自らの社会科カリキュラムや授業に教科横断的なリテラシー教育を無理なく適合させたり、リテラシー教育を統合することでより社会正義志向のカリキュラムや授業へと変革を図ったりする教師がいることを確認した。そして、その際のゲートキーピングの特質として、「現実的なカリキュラムや授業の調整」のあり方と「革新的なカリキュラムや授業の調整」のあり方が存在することを指摘した。

第二に、日本の教師がどのようにカリキュラムや授業を調整しているのかについての考察を深めることができた。教師のゲートキーピングには、「教育のねらいについての議論(aim talk)」が重要であるが、その拠り所は、一般的に、児童生徒の興味関心や適性、社会生活からの要求、現代の学問的成果、であるとされている。本研究では、日本の一教師の実践を手がかりにして、社会科授業がどのように調整されているのかを探った。さらに、教育のねらいについてしっかり吟味された学習は、歴史や地理の分化したカリキュラムを前提としていても、公民やシティズンシップ教育との結びつきが強くなりうることを指摘した。領域間の連携・横断を意識することが重要であることを示した。

(3) 学力形成を支える教科横断的な取り組みに関する考察

子どもの学力を育成するためには、教科をこえた学校全体の取り組みも重要になる。本研究では、一つの示唆的な社会科実践を取り上げ、それを成立させている学校全体の取り組みを分析することができた。対象となる学校では、全教科等共通で、「具体的に伝える」「意図的に求める」「批判的に検討する」「調和的に集約する」ことが重視されている。これら四つの要素を基にした学びの指標が各学級で具体化され、教室に掲示されている。四つの要素や学びの指標が実現するように授業の工夫もなされている。また、指標を確認したりその達成度をふり返ったりする活動が学習の中に意識的に組み込まれている。本研究では、これらの教科をこえた共通の取り組みによって深い学びが成立し、社会系教育の学力形成が促進されうることを示した。

(4) 学力形成を促す授業の構想

本研究では、学力形成を促す授業の開発を試みた。特に、教科や領域の横断を意識した授業を重点的に構想した。その際には、改訂された学習指導要領の一つのキーワードである「見方・考え方」に焦点を当てて考察を行い、具体化を試みた。成果は以下の通りである。

第一に、初等教育の授業開発を進めることができた。具体的には、小学校の地域学習における論争問題学習の一事例を分析し、それが「位置や空間的な広がり視点」「時期や時間の経過の視点」「事象や人々の相互関係の視点」から総合的にアプローチするものであり、社会的な見方・考え方を領域広く鍛えることが想定されていることを示した。このような考え方を応用して、授

業の構想を行った。例えば、農業の学習では、なぜ日本の農業が衰退してきたのかを「時期や時間の経過の視点」から考える、欧米や日本の様々な地域で見られる対策や取り組みを「位置や空間的な広がり」の視点で考える、大規模経営的な農業や地域主体の農業などの様々な取り組みを検討し、「事象や人々の相互関係の視点」から今後の食料生産のあり方や生活への影響を考える、という学習を設計した。同様に、水産業の学習では、なぜ日本の漁業が衰退してきたのかを「時期や時間の経過の視点」から考える、ノルウェーの漁業の成長の理由や日本との違いを「位置や空間的な広がり」の視点で考える、「事象や人々の相互関係の視点」で、これからの漁業にはどのような仕組みや対策が必要なのかを考える、という学習を設計した。

第二に、中等教育の授業開発を進めることができた。例えば、高等学校の歴史総合の大項目C「国際秩序の変化や大衆化と私たち」の中項目(2)「第一次世界大戦と大衆社会」に位置づく「大量消費社会と大衆文化」の学習を以下のように設計した。まず、「なぜ大量消費社会が誕生し、大衆文化が生まれたのだろうか」を学習課題として設定する。その問いに対して、様々な領域の社会的な見方・考え方を活用して考察を行う。例えば大量消費社会が成立した理由を、フォードのモデルTの生産と普及から考える。また、フォードの市場でのシェアが減り、GMが躍進した理由を、経営理念や販売戦略から考察する。ここでは、「変化」や「原因」などの歴史的な見方・考え方のみならず、「効率」や「分業」などの経済的な見方・考え方の活用を想定している。授業の最後には、「あなたは、当時の社会や文化の変化のうち、その後の政治や経済に最も大きな影響を与えたのは何だと考えるか、それはなぜか」という問いに向き合わせる。ここでも社会的な見方・考え方を幅広く活用して、歴史を領域横断的に探る活動を想定している。

以上の他に、本研究では、社会系教科の学習の延長線上に位置づく総合的な学習の時間の授業の構想も行った。具体的には、ポップカルチャーを活用したジェンダー学習の授業開発である。この授業は、様々なポップカルチャーを分析し、その中に込められている「男らしさ」や「女らしさ」を分析するとともに、それらがどのように私たちのジェンダー意識に影響しているのかを探るものである。また、近年のポップカルチャーに見られる「男らしさ」「女らしさ」のゆらぎを考察し、今後のポップカルチャーのあり方や自分たちの関わり方について考える学習となっている。この授業は、教科等の枠をこえた汎用的なスキルの育成に大きく関わっている。また、あたりまえを疑う姿勢や、当事者として将来を考える態度の育成も意図したものになっている。

その他、本研究では、岡山県の意欲的な授業事例を分析したり、思考や対話に関わる学習活動について考察したりして、授業開発への示唆を引き出した。

本研究は、学校現場での実践や検証には至らなかったものの、社会系教育における学力形成の方法を多様な観点から示すことができた。本研究の成果を、今後の教育実践につなげていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 山田秀和	4. 巻 749
2. 論文標題 わが県の情報 ここに「この授業」あり：岡山県の巻	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会科教育	6. 最初と最後の頁 126-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山田秀和	4. 巻 739
2. 論文標題 社会科における深い学びの実現とは：教科の深い学びを支える教科横断的な取り組み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会科教育	6. 最初と最後の頁 120-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山田秀和	4. 巻 742
2. 論文標題 主体的な学習者を育む社会科カリキュラム：教師による主体的なカリキュラム・デザインの重要性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会科教育	6. 最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山田秀和	4. 巻 91
2. 論文標題 社会科とリテラシー教育の統合による市民性育成 アメリカにおける二つの方向性に焦点を当てて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会科研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20799/jerasskenkyu.91.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山田秀和	4. 巻 172
2. 論文標題 社会科におけるスキルの構造とその育成方略 教科・領域の固有性と横断性を視点とした一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岡山大学大学院教育学研究科研究集録	6. 最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18926/bgeou/57561	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高畑昌志, 山田秀和	4. 巻 10
2. 論文標題 社会科における思考支援の方法に関する一考察 帰納的推論の場合	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岡山大学教師教育開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 91 - 105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18926/CTED/58123	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野中惇, 山田秀和	4. 巻 10
2. 論文標題 中等社会系教科における対話の目的 その類型化の試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岡山大学教師教育開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 153-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18926/CTED/58127	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田秀和	4. 巻 723
2. 論文標題 歴史力アップの宿題・課題テーマ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会科教育	6. 最初と最後の頁 24-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田秀和	4. 巻 41(3)
2. 論文標題 社会科におけるリテラシー教育の統合方法 アメリカに見られるアプローチを類型化して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18993/jcrdajp.41.3_29	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田秀和	4. 巻 169
2. 論文標題 社会科とリテラシー教育の統合における教師のゲートキーピング 社会正義志向の教師に関するアメリカの研究が示唆するもの	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岡山大学大学院教育学研究科研究集録	6. 最初と最後の頁 25-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18926/bgeou/56363	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田秀和	4. 巻 なし
2. 論文標題 小学校社会科における「伝統・文化」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東書教育シリーズ 新学習指導要領と現代的な諸課題	6. 最初と最後の頁 18-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田秀和	4. 巻 711
2. 論文標題 今、日本の農業・水産業をどう教えるか：社会的な見方・考え方を鍛える切り口	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会科教育	6. 最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山田秀和
2. 発表標題 社会科とリテラシー教育の統合における教師のゲートキーピング アメリカの研究に手がかりを求めて
3. 学会等名 全国社会科教育学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 桑原敏典, 清田哲男 (編著)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 日本文教出版	5. 総ページ数 192
3. 書名 子どもが問いを生み出す時間 - 総合的な学習の時間の指導を考える -	

1. 著者名 國分麻里, 川口広美 (編著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 中等社会系教育	

1. 著者名 日本教科教育学会 (編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 教育出版	5. 総ページ数 191
3. 書名 教科とその本質 各教科は何を目指し, どのように構成するのか	

1. 著者名 社会認識教育学会（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学術図書出版社	5. 総ページ数 208
3. 書名 中学校社会科教育・高等学校地理歴史科教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------